

Title	レカミエ夫人 (1)
Sub Title	Madame Récamier et Madame de Staël
Author	後平, 隆(Gohira, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.42 (2006. 3) ,p.47- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060331-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レカミエ夫人 (1)

後 平 隆

ダヴィドの肖像画

ダヴィドが描いた「レカミエ夫人」の肖像画を覚えていますか。ルーブル美術館の一角を占めるフランス近代絵画の部屋を歩いた人なら、きっとその前で足をとめたはずです。二十歳すぎの女性が、長椅子のうえに横様にすわりながら、ややきつい眼差しをこちらに向けている。身には、やわらかく体の線を浮き上がらせている白い薄絹を纏うだけで、首筋、腕をあらわに、素足を投げ出している。髪はもじゃもじゃしているが、それを額にまわしたバンドで無造作に首筋のうえで押さえている。背景としては、ただくすんだ色調の壁だけ。アンシャン・レジーム期のこってりとした絵をあとにしてこの絵の前に立つと、ちょっと驚き、時代の好尚が変わったことをまず感じてしまう。そしてつぶやいたのではないのでしょうか、この若く美しい女性は誰？なぜ「ナポレオンの戴冠式」の絵を託されるほどの大画家の前でポーズをとっているのだろう？なにをした人かしら？ほくもそうつぶやいた一人です。

アンドレ・モーロワが言ったそうです。この肖像画は彼女について書かれた数冊の本よりも、彼女の謎について教えてくれる、と。しかしほくに関していえば、微笑みの影すらみせずこちらを見つめる「レカミエ夫人」の前に立つたび毎に、いよいよ掴みどころが無くなりそうでした。そんな記憶が残っていたからでしょうか、あるときほくは、姪のルノルマン夫人がまとめた『追想と書簡』二冊を手に取り、合わせてエドワール・エリオの『レカミエ夫人と友人たち』も読んでみました。そしてレカミエ夫人の謎とやらに思いを巡らしました。たぶん謎と言われるのは、たとえ国境を越えてその美貌

を謳われたにせよ、彼女自身なにひとつ著作を残さないで世を去った人が、最後まで数多くの貴顕、文人、政治家を引きつけてやまなかったのはなぜか、ということではなからうか。彼女のサロンの常連のなかで、とりわけ重要な存在は、ルネ・ド・シャトーブリアンでした。シャトーブリアンは19世紀前半（前半、という限定をはずす評家もいます）最大の作家といわれ、王党派の一方の旗頭として活躍した政治家でもあります。もし彼の後半生から、ジュリエット・レカミエの存在を取り去ったら……と想像するだけで、彼女が果たした役割の大きさがわかります。レカミエ夫人なしのシャトーブリアン。そんな仮定が成り立つとは、到底思えません。それほどジュリエットは不可欠な存在になっていました。

レカミエ夫人について書かれた回想や伝記を読んでみて、ほくはじつに意外な発見を重ねました。まず彼女の生涯を辿ると、フランス革命から第一帝政をへて、王政復古、七月革命、そして七月王政が1848年2月革命によって終止符を打たれるまでの、半世紀にわたる同時代史が書けそうなのです。それほど彼女は政治的変動にコミットしていました。より正確に言えば、深くコミットしたのは主に彼女の友人たちですが、彼らとの交友があまりにも密接だったので、彼らの文筆活動や政治的活動が引きおこす大波小波に、レカミエ夫人自身、その都度巻き込まれざるをえなかった。ですから、レカミエ夫人の伝記のなかには、通常歴史家が叙述するのとは一味違う、いわば生きた人間の鼓動が聞こえるフランス19世紀前半の歴史が、見えてくるのです。

もうひとつの発見。それはレカミエ夫人が、文学史上に名を留める文学者たちと親しかったことです。ジェルメーヌ・ド・スタール夫人やバンジャマン・コンスタン、それからシャトーブリアンの著作を、ほくは人並みに読んでいましたが、ついぞジュリエット・レカミエが彼らの人生に落とした大きな影に気づきませんでした。ただそれも、ほくが迂闊だったから、とばかりは言えない気がします。なぜなら『文学論』『ドイツ論』『コリンヌ』、あるいは『アドルフ』『征服と篡奪の精神について』、あるいはまた『アタラ』『ルネ』『墓の彼方からの回想』などを読んでも、そこにレカミエ夫人の姿がみえないか

らです。なるほど『墓の彼方からの回想』の29巻目はレカミエ夫人に捧げられています。でもいま読み返してみても、なんだか薄いヴェールを透かして、しかも月の光に浮かび上がるジュリエット・レカミエをみているような印象を受けるのです。つまりシャトーブリアン一流の陶酔的な文章から、女主人公の姿が生々しく立ち上がってくる気配は感じられない。初めてそれを読んでずいぶん月日が流れたあとで、ダヴィッド作「レカミエ夫人」のまえに佇んだとき、昔の読書がおぼろにも記憶に浮かんでこなかったのは、たぶんそのせいでしょう。

ところがレカミエ夫人の近親の回想や、彼女の伝記を通読すると、彼ら文学者が入れ替わり立ち代り登場する姿がそこにあります。通常の文学史は、文学者の交友関係というような事実にはほとんど関心を払いません。しかし作品がどのような場で、いかなる契機から創作されたかを知ることは、とても大事なことではないでしょうか。が、また一方では、偽らざる感想として、回想や伝記からでは、交友関係の実態が浮かび上がってくるとも思えない。たしかに回想や伝記はいろいろな事実をほくに教えてくれましたが、彼らが肉声で互いに呼び交わす模様を耳にしているという印象は、薄いのです。

結局のところ、折ふしにダヴィッドによる肖像画を思い浮かべ、ルノルマン夫人の二巻本を紐解いてきたけれど、ほくの興味がそれ以上先に進むことはありませんでした。

レカミエ夫人宛の手紙

ところが先ごろ、シャトーブリアンがレカミエ夫人に宛てた書簡集を通読して一驚しました。『墓の彼方からの回想』第29巻を包む気取った雰囲気、大向こうをうならせる名調子との、これはまたなんとという相違！面白くなつたほくは、書架に眠っていたコンスタンのレカミエ夫人宛書簡集を抜き取りました。驚きはいや増すばかり。独裁者ナポレオンを弾劾する、緻密で激烈な論文の、これが著者！こうなると、もうやめられない。今度はスタール夫人の、次はバランシュの、アンペールの、と、レカミエ夫人と深い絆で結ばれ、ともに生きた友人たちが彼女に送った手紙を読み漁った挙句、ほく

はため息をつき、そしてつぶやきました。発表された作品はそれとしておもしろい、でもやっぱり作家の人柄は、親しい友に語りかけた文章にこそ如実にあらわれるのだ、と。しかもこの人たちは、とびきりの美女にたいして胸襟を開こうとして、それを寛恕されているのだから。

ほくは書簡集を繰る間中、なんだか文学史を裏から読んでいる気がして仕方ありませんでした。舞台上上がる前の、あるいは舞台から下りてきてからの役者の素顔を眼にし、なまの声音を耳にしている、そんな感覚に捉われます。レカミエ夫人がいわば鏡となっている。鏡に映し出されるのは、観客のうけを狙う緊張から解き放たれ、舞台衣装を脱いだ作家の姿です。

ところで手紙は、文面とそれを伝達する語り口の両方から、送り手を裸にして見せてくれるだけではありません。もう一方でそれを送られたレカミエ夫人についても、ほくたちがいろいろ推考するのを助けてくれます、やはり文面と、それ以上に、彼女を念頭に置きながら彼らが採用した語り口から。ですからレカミエ夫人の謎、もし謎があるとしたらですけれど、それを解くための最良の手がかりも、友人たちが彼女にあてた手紙のなかに見つかるかもしれない。自分自身著作を残さず、また派手な政治的活躍によって記憶されているわけでもない女性が、彼らにとって無くてはならない人として、いわば慎ましく君臨し続けたその訳とは？

という次第で、これから文学史の舞台裏にまわり込みたいと思います。そして照明を、舞台上に並んだ作品ではなく、生身の作家に当てるのです。その際に、あわよくば照明の照り返しが、レカミエ夫人をつつみ込む“わからなさ”の闇を多少とも払ってくれまいか。

そんな秘かな目論見を抱いて、まずはスタール夫人ジェルメーンがレカミエ夫人ジュリエットに宛てた手紙から読んでみようと思います。

スタール夫人の手紙

出会い

ふたりの交友は、レカミエ氏がスタール夫人の父ネッケルの館を買い取ったときに始まります。1798年、ようやく亡命者リストから名前を抹消され

たネックレスは、娘に託してパリの館を売ろうとしていた。それをこの父娘の銀行家だったレカミエが買った。二人が初めて出会ったときの模様をレカミエ夫人が回想しています。それによると彼女は、日ごろ賛嘆するジェルメーヌがふいに目の前に現れたので、気後れから、どぎまぎする。が、ジェルメーヌは相手の狼狽の意味をよく理解し、かえって彼女の美貌に率直な賛辞を呈した。

回想の一部を引用してみます。二人を結びつける絆の基調がそこに読み取れるでしょう。

「(……) 父のネックレスが……その言葉で、スタール夫人!とわかった。そのあとは耳に入らない。わたしは赤面し、ひどく狼狽した。先ごろ読了した『ルソーについての手紙』はわたしを夢中にしていた。目は言葉以上に、わたしの感じていたことを表わしていたと思う。わたしはスタール夫人を前に、怖じけずき、魅了されていた。わたしは彼女が、卓越した人格と、あくまでも自然な人柄の持ち主であると直ちに感じた。彼女のほうは、好意に満ちた、好奇心いっぱいの大きな目でわたしを見据えていたかとおもうと、わたしの顔立ちを褒めた。賛辞は思わず口をついて出たらしかった。もしそうでなければ、それは大袈裟で、あまりに直接的すぎる賛辞だったかもしれない。しかしそのせいで、彼女の褒め言葉はかえってわたしを喜ばせた。彼女はわたしの狼狽ぶりを悪く取るどころか、それをよく理解して、今度パリに戻ってきたら頻繁に会いたいと言った。ちょうどコペーに向けて旅立つところだったのである。彼女の出現は一瞬の出来事だった。しかし印象は強烈だった。もう頭の中はスタール夫人のことばかり。それほどにわたしは、激しく、強い彼女の人格の作用を感じたのだった」¹⁾

1766年生まれのジェルメーヌはこのとき32歳、すでに数々の論説で名声を博している。しばらくの間、二人の関係は、10歳ちがいの妹がきらきらと輝く才走る姉を仰ぎ見る、というような感じで推移したらしい。

「あなたが手紙を書きながら感じる、妙な気後れが無くなっていたらよかったのに。わかっていらっしゃるはずよ、わたしがあなたを好きだということ、そしてあなたが咎めている才気にしたって、もっとあなたのことを見抜き、さらにやさしくあなたを愛する理由をみつける役に立っているだけだということを」²⁾

スタール夫人追放

二人の関係に変化が兆すのは、1803年10月スタール夫人がナポレオンの追放令を受けた頃からです。

このときすでに終身執政の地位にあり、ほぼ半年後には皇帝に推挙されるナポレオンにとって、スタール夫人はいわば獅子身中の虫でした。「わたしはスタール夫人にパリにいて欲しくない。それには十分な理由がある……もしスタール夫人が王党派か共和派になりたいというなら、あるいはどちらかになれるものならば、それで結構。ところが彼女はパリに数あるサロンをかき回すうるさい機械なのだ。こういう女を恐れなければならないのはフランスに特有の事情だ。しかしわたしには我慢ならない」(メッテルニヒ宛の手紙)というわけで、ナポレオンはスタール夫人にたいし、パリ40里以内に足を踏み入れることを禁じたのです。今の尺度でおよそ160キロメートル、な～んだ、たいしたことないじゃないか、と考えてはいけません。

追放令をくらったスタール夫人の嘆きを理解するには、たとえばトクヴィルの『アンシャン・レジームと大革命』の記述を思い出してみるとよいでしょう。絶対王政が中央集権化を押し進めた結果、社会・政治・文化面でのすべての活気はパリに集中した、と彼は言います。そしてパリのなかでは、上流の人々が集まるサロンの動向が、文化的のみならず政治的にも、ナポレオンが恐れるとおりの力を発揮するようになりました。ですからスタール夫人のように、自分の能力に絶対の自信をもつ活動的な精神にとっては、パリから160キロ離れたところなど、砂漠同然だったでしょう。

彼女の『追放十年』を通読しただけでは、そこに叙述される彼女の行動のほうにむしろ関心が向いてしまい、合間にはさまれる愁嘆が通り一遍のもの

に聞こえるかもしれません。しかしこう言われたらどうですか。「追放がどういうものかなんて、誰にも見当がつかないでしょう。それはまるで、ギリシャ神話のヒュードラが、百の頭をもった不幸になって襲い掛かってくるかのように」(同書、p.110)



その後のスタール夫人は、追放令の解除をナポレオンの側近に働きかけるしかありませんでした。あるいは皇帝が戦地にいるのをよいことに、警察のお目こぼしをあてにして、パリにできるだけ近づいてみるとか。その点で、スタール夫人がジュリエットの交友関係に期待したふしがあります。というのは、ナポレオンの弟のリュシアンが、1799年ジュリエットに初めて会って以来、「ロメオからジュリエットへの手紙」というフィクション仕立ての凝った恋文を何通も寄せるほど、彼女に熱をあげていたからです。また将軍ベルナドットの知遇もえていました。しかしレカミエ夫人の尽力もむなしく、悲嘆に暮れるスタール夫人はドイツに旅立つことになります。

それからのスタール夫人の境遇をかいつまんでみます。ジュリエット宛ての手紙からはなかなか窺えないけれど、しかし二人が置かれた状況を知る上でとても大事ですから。多少煩瑣に思われるでしょうが、年代も記しておきます。この時代、すべてはナポレオンの動向との関連で動いていきますから、年代は重要な指標になります。

ドイツでのスタール夫人は、ナポレオンに迫害される自由主義の旗手として、さらなる成功をえます。ついで1804年の春には、彼女が崇拝してやまなかつた父ネッケルが死去。がらんとしたコペーの館の夏は、彼女には耐えがたかった。くわえて、腐れ縁のバンジャマン・コンスタンが彼女の支配圏から抜け出そうと画策していることも、彼女の苦しみを増す。そこで今度はイタリア旅行にでます。旅路からジュリエットに宛てた少数の手紙が残っています。引用は省きますが、それを讀むと、彼女が相変わらずレカミエ夫人の政治力をあてにして、追放令の解除を期待していることがわかります。

翌年の春イタリアからもどったスタール夫人は、コペーの館に落ち着き、『コリンヌ』の執筆にとりかかる。彼女の名声はいまや全ヨーロッパ的にな

り、コペーの館は半ナポレオン陣営が集う場所として、各国からさまざまな人が訪れるようになる。ついで1806年春から翌年にかけて、完成した『コリヌ』を出版するためにスタール夫人はパリに接近し、執拗に追放令解除を働きかける。1807年には、警察大臣フーシェのお目こぼしにあずかって、彼女はパリまで12キロの地点に滞在していました。皇帝の不在をいいことに、大胆になった彼女は、パリ市内にまで忍び入りますが、もちろんそれは警察大臣の知るところとなります。が、彼はそれにも目をつぶったまま。フーシェはなにをを考え、なにを画策していたのでしょうか。ナポレオンとフーシェの関係を考える上でなかなか興味深い事実です。

ところがどっこいとは、このことでしょうか。同じ情報は、東プロイセンのアイラウで連合軍相手に辛勝をおさめたばかりの皇帝の耳にもきちんとして入っていたのです。警察大臣は皇帝から激怒の手紙を受け取ります。「あの女は鴉だ。もう嵐がやってきたと思って、陰謀と気違い沙汰に明け暮れている。即刻あの女をレマン湖のほとりに追いやるべし。あのスイス人どもは、まだわれわれの利益を損ね足りないともいうのか」（同書、p.91）

以上がこの時期におけるスタール夫人の境遇です。彼女の名声はヨーロッパ中に響きわたり、彼女の身边は多忙です。

ジュリエットへの手紙

ところで同じ頃にレカミエ夫人へ宛てた手紙は、華々しい公の活動について、ほとんど触れていません。そこに読まれるのは、表の活動の報告ではなく、その陰の部分、つまり外からは窺い知れない感情の吐露です。そこで注目したいのは、あまり人には見せない心のひだの表白より、むしろそれを語る彼女の語り口です。たとえばこんなふう言っている。

「あなたは前より頻繁にプロスペールに会うようになったから、それで、わたしにももっと頻繁に手紙を書いてくれるとのこと。白状すれば、彼があなたに寄せる好意をあなたが拒まないのではないかと、わたしは心配です。もしそうなったら、わたしは死ぬほどの苦痛を味わうでしょう。

なぜって、わたしの最初の感情のうちのふたつが、それによって乱されることになるでしょうから。ジュリエット、それはやめて頂戴。わたしは追放の身の上、こうしてあなたに胸の内を明かしている、それにあなたの魅力には到底太刀打ちできない。あなたは寛大な人、彼を相手にほんのちょっとでも媚態を示したりはなさらないでしょうね。といっても、それはわたしに対する彼の愛情を確信しているからではないの。それどころか絶えずそれを疑わなければならないのが、わたしの不幸。もしそれに、あなたがその原因だと思ふ不幸が重なったら、なんとおぞましいことでしょう。もしそうなったら、それに耐える力がわたしにはもう残っていないでしょう（このことは二人だけの秘密）」（同書、p.101）

レカミエ夫人はもっと頻繁な通信を求めるジェルメーヌにたいして、彼女の恋人プロスペール・バランツのパリでの消息を伝えるためにも手紙を書きましょう、と返答したらしい。手紙はもらいたい、でもプロスペールがあの美しいジュリエットとしょっちゅう会っているなんて……とジェルメーヌはやきもきもして、しかもその気持ちを、じつに率直に語っています。この文面には、まるで構えたところがみられません。

この真率さは、レカミエの銀行が破産したおりに彼女がジュリエットに送った手紙では、いっそう明らかです。レカミエの破産の陰には、ナポレオンの意思が見え隠れしています。その夫人ジュリエットが追放中の女と親しくするのをやめないことに苛立つナポレオンが、レカミエにたいしてフランス銀行からの融資を拒否したのです。ナポレオンの怒りがスタール夫人を超えて、レカミエ夫人にも及ぼうとしている。

「たしかにあなたの状況は、以前と比べたら、悪くなったといえるでしょう。でも、もし愛するものを羨んでよいものなら、わたしはあなたに成り代わるためならば、わたしのすべてをそっくりあげてしまってもいい。ヨーロッパ中で並ぶもののない美貌、瑕のない声望、性格は誇り高く、しかも寛容。ああ、人がすべてを奪われて歩かなければならないこの人

生においては、まだなんと幸福なめぐり合わせでしょう。ジュリエット、わたしの願いは、ふたりがもっと親しくなって、もう単に親切心から助力を与えるだけでなく（それに助けてくれるのはいつもあなた）、途絶えることなく文通しあい、考えていることを互いに打ち明ける必要を二人ともが感じ、そして一緒に生活をする。ジュリエット、わたしをパリに戻してくれるのはあなたよ。なぜって、これからも、あなたに不可能なことなどないのですもの。それにあなたはわたしより若いのだから、あなたがわたしのまぶたを閉じてくれるのよ。そして子供たちを、あなたの友人にしてあげて頂戴」（同書、p.103）

この文面からはジュリエットの美しさにたいする羨望がたしかに読み取れます。富も名声も地位も、若年のころからすべてを備えて大きくなったスタール夫人に、唯一欠けているのが、美しい容姿でした。ところが、注目すべきことに、手紙には妬みの影すら射していない。この自信満々で、誇り高い女が、ジュリエットへの手紙のなかでは、繰り返し彼女の愛情を求めている、まるで恋人の愛に餓えているかのように。

「信じて頂戴、わたしがいつもあなたのことを思っていることを、そしていつだってあなたは恋人のようにわたしを意のままにできるということを」（同書、p.104）

「わかっていらっしゃるでしょう、まるでわたしが恋をしているかのように、あなたの魅力は、わたしに働きかけてくることを」（同書、p.106）

「お願いだから、ジュリエット、ふたりの心のあいだに何も挟まないでほしいの。これほどまでにあなたに惹かれ、感謝の気持ちに溢れ、あなたを高く評価しているのですもの。あなたがただ一本のとげでも、わたしがあなたに抱えている感情とあなたに寄せている信頼のあいだに置くと、もうそれだけで心が痛むのよ」（同書、p.110）



こういう手紙を書いているあいだにも、スタール夫人の身辺はなかなか

騒がしくなっている。『コリンヌ』は出版と同時に成功をおさめ、コペーの夏には大勢の友人が集う。そして今度は『ドイツ論』の執筆にとりかかり、1810年4月にはその印刷が始まる。ところが同年2月に帝国政府は印刷と書籍販売を監視する役所を創設し、検閲を強化。6月にはフーシェ解任。かわってスタール夫人に敵対的なロヴィゴ公爵が任命されると、反対派弾圧のあらたな措置がとられ、彼女にたいする締め付けは厳しさをます。その結果9月には、滞在先のフォッセ城を48時間以内に退去するようとの命令が彼女に届きます。さらに警察は『ドイツ論』の原稿とゲラの提出を求め、翌月には印刷用原版を壊し、印刷済みの本を破碎します。

こうした矢継ぎ早の弾圧措置によって、スタール夫人の生活圏は一挙に狭まり、ほとんどコペーとジュネーヴに限定されてしまう。パリに戻るなど、もはや夢物語です。



さて彼女の公の活動が次々に大波を引き起こし、彼女を飲み込もうとしているときに、ではレカミエ夫人への手紙はなにを語っているのでしょうか。それは以前に変わらず、内面を蝕む空虚な思いの表白であり、纏れてゆく一方の感情生活の訴えです。なるほどコンスタンは相変わらず煮え切らない態度で、彼女の支配をのがれようと算段しては、また寄りをもどすことをくりかえしている。あるいは『アドルフ』を彼女に読み聞かせて彼女の怒りを爆発させもする。ついにはスタール夫人には内緒で、以前から画策していたシャルロッテ・ド・ハーデンベルクとの結婚を成立させる。

この時期、レカミエ夫人宛の手紙に、バンジャマンにとりなしを頼む文面が目立つのはそのためです。

「バンジャマンは、わたしが彼を不満におもっていると、あなたに言ったのね。ああ、なんということでしょう、わたしの心痛の種はたったひとつだけ、でも本当につらい種。それは、愛されていないのではないかという恐れです。もし愛されていると確信できたら、わたしの人生のすべての不幸は消滅するでしょうに。けれども彼も、あなたも、誰一人と

して、その点について真実を話してはくれないでしょうし、わたし自身、真実を引き出すことはできないと感じています。だって、もし真実がわたしの願い通りでなかったら、どんなにかつらいことでしょうから」（同書、p.124）

「バンジャマンに会って、しばしば会って頂戴。あなたからの話なら、彼もずっと信用するでしょう。あなたはとても上手に友人たちを引き立ててくれるのですもの。そうしたらあなたは、わたしの命の恩人ということになるでしょう。なぜって、青春時代を通じての友がいない人生なんて、もう人生ではない。彼と一緒にすごすコペーに較べれば、この世でのあらゆる成功、あらゆる褒め言葉などなものでもない。わたしは気晴らしに努めています、彼がわたしを苦しめるから。でも傷をおっているのは心。だから、本当よ、もし彼がわたしを去るなら、わたしは死んでしまうでしょう」（同書、p.125）

なんとしてもコンスタンをコペーに迎えたいスタール夫人には、ジュリエットの口添えだけが頼りなのです。いずれコンスタンの二枚舌がばれるときが来て、彼女は打ちひしがれるのですけれども。

事の次第はともかく、スタール夫人の語り口は、相変わらず率直そのものです。若く美しい友にたいする蟠りは一切感じられません。ところでレカミエ夫人がどういう返書を認めていたのか、気になるところです。残念ながら返書は残されていない。が、推測するに、ジュリエットのほうはあけすけに心のうちを明かしたりしなかったらしく、それがまたジェルメーヌには物足りないのです。もっと胸襟を開いて語り合いたいという欲求は、彼女を取り巻く内外の状況が悪化し、彼女が追い詰められていくほどに、彼女のうちに高まっていくように見える。

「あなたのことを話して頂戴。あなたからの手紙があんまり淡々としているので、あなたを思うわたしの優しい感情は腹を立てているわ」（同書、p.144）

「わたしのことばかりこんなに話すなんて、恥ずかしくなります。もしそんな赤面からわたしを救ってくださりたければ、あなたに関するどんな些細なことでもわたしに話してください」（同書、p.151）

たしかに境遇の違いを考えれば、ジェルメーンがジュリエットに縋る立場に身を置いてもおかしくありません。たとえ皮相な観察者の目には、スタール夫人がウィーンであれどこであれ、つねに大歓迎をうける名士として映じていたにちがいないとしても。

レカミエ夫人追放

ところが1811年に入ると、スタール夫人はいよいよわが身に迫る危険を感じ、真剣に逃避行を考え始めます。『追放十年』に着手するのが5月。8月になると、旧友マチュウ・ド・モンモランシーがコペーを訪ねてくる。レカミエ夫人も同じ意向をもちます。傍目には無謀としかみえないその意向に対して、警鐘を鳴らした友人がいました。その折に彼女が語ったことをルノルマン夫人が伝えています。

「この臆病な忠告にたいし、レカミエ夫人は答えた。政府に対して害意のない女が、今しもフランスを離れようとしている不幸な友達を訪ねるのは、ごく当然で、しかも罪のないことではないかしら。政府がそれに疑念を抱くなんて、自分にはとても想像できない、と。しかし結果がどうあれ、彼女の心は決まっていた。迫害されている人にたいし、尊敬と愛情のしるしを伝えないわけにはいかない」³⁾

こうしてレカミエ夫人は旅の人となる。ところが旅路の彼女が知る由もない沈鬱な空気が二、三日まえからコペーの館を包んでいます。原因はマチュウ・ド・モンモランシーに伝えられた、パリから40里以上遠への追放命令。スタール夫人は打ちひしがれます。レカミエ夫人からまもない到着を知らせる手紙が、霹靂のように落ちてきたのは丁度そのときでした。驚きと不安の

うちに二人は、コペー近郊の村でレカミエ夫人を止めようと人をやる。その折のスタール夫人の寸書。

「わたしの絶望をわかって頂戴、ジュリエット。わたしの気持ちはオーギュストが伝えてくれるはず、でもわたし以外のだれにわかるかしら、この気持ち。後生だから危険は冒さないで。トレルで会うのが最善のようにわたしには思える、でもあなたに降りかかるかもしれない不幸に、わたしはとでも耐えられないでしょう。わかってくれるわね、わたしがわたし自身の苦しみにかけてあなたに話しているということが。だってあなたの心を動かすとしたら、それしかないのですもの。ああ、わたしの天使、わたしを憐れとおもって！」（前掲書、p.199）

けれどもジュリエットは来る。『追放十年』はそのときのことをこう書いています。

「わたしは人をやって、どうか来ることを見合わせてほしいとレカミエ夫人に頼んだ。ああ、わたしが愛してやまない、そしてわたしをこの上なく貴く、そして繊細な心遣いでたえず慰めてくれた人をほんの数里さきを感じながら、その人がわたしの館からすぐのところまで来ているのを知りながら、もういちど彼女を、たぶんこれを限りと抱きしめることが許されないなんて！ 彼女は、たとえ数時間にせよ、わたしに会わずに、館の窓下を通りすぎることはできないからと言って、わたしの懇願を聞き入れなかった。いつも心躍る思いで彼女を迎えたこの館に彼女が入ってくるのを見たとき、わたしは涙で身をよじった。」⁴⁾

結果は、やはりパリから40里以遠への追放でした。ジュリエット追放の報がもたらされたとき、スタール夫人は、あなたに話ができない、足元に身を投げるだけ、と書き送っています。この事件は、レカミエ夫人が美しいだけの女ではなく、必要とあらば、決然として理不尽な迫害に抗議できる強い

女でもあることを証明しています。

スタール夫人の手紙の真価

それから間もない頃、スタール夫人はまた一通の手紙を送ります。この手紙には、レカミエ夫人宛ての数多い手紙に見られた特徴が集約しているように思います。友の運命を狂わせてしまった、という忸怩たる思いがスタール夫人を駆り立てて、なおいっそう心のなかをジュリエットに曝け出させる。しかしそれは、彼女なら呻吟する自分を理解してくれる、という確信があったのことに違いありません。そして彼女は間違っていないでした。大事な手紙なので、少し長く引用します。

「要するにこれは精神の崩壊です。それがどういうものか見当がつくようなことに、あなたにはなつて欲しくありません。わたしのこの状態は誰にも打ち明けません。わたしの境遇に由来する重圧を彼らに負わせるだけで、もう十分。わたしの苦痛をさらして、さらに重圧を加えたくはないのです。でもあなたにはお話します、あなたにはわたしを公正に判断して欲しいから。わたしのせいで迫害の憂き目に会っている天使であるあなた、もしあなたがわたしの感情に疑念を抱くようになったら、それこそわたしの残酷な運命は極まるでしょう。オーギュストはまずあなたにお目にかかって、それからパリに行きます。彼がわたしのためにどう決断するか、あなたがよかれと思うことを、その折にでも彼に言ってください。彼が自分で決めることです、たとえ全面的にはないにしろ。しかしわたしは確信しています、わたしがあなたとマチュウのためにできる最良の奉仕、それはわたしが遠くへ離れることです。たしかに、わたしは不運な巡り合わせに付きまわられている。恐れていたことが、すべて身に降りかかってきました。もうにっちもさっちもいきません。わたしが去ってしまいたいと思うのは、見通しや計画や野心があつてのことではありません。ただただ絶望に駆られているだけのこと。でもわたしには、自分が子供たちや友人たちの幸福の障害になっていることがあ

まりにも感じられて、苦しいのです。ですからこの障害を、まるでそれがわたし自身ではないかのように、なんとか取り除きたいのです。ごめんなさいね、もういちど謝ります、こんなに病的な感情の有り様をあなたに描いてみせるなんて。あなた自身、ありったけの勇気を振絞らなければならぬ時だというのに。でもわたしの心のなかで何がおきているか、どうしてもあなたには知って欲しいのです。外にたいしては、まだ自制しています。心の内を曝け出してはいけない、と自尊心がわたしに忠告しますから。周りの人の涙も、自分の手に余ることを頼まれると、さっと乾いてしまうものです。まるで煩わしい債権者になったかのような気がします。しかし、もしわたしが自制していなければ、悲惨極まる光景が人目についているはずです。ひたすら祈り、神にすがりつきますが、どうやら神様を疲れさせたようです。天はわたしに冷酷なままに思える。その感じには堪え難いものがありますけれども、わたしはそれを外には向けません。自分自身に対してつきつめます。そして自分はよほど罪深いのだ、と自身に言い聞かせます。神は正義ですから、だれもが自分にふさわしいものだけを背負うはずですもの。あなたとフェルネーでお別れして以来、そしてあなたの追放の知らせを受け取って以来、わたしの心に湧き起る感情は、どれも息の根を止めるものばかり。苦しみ疲れると、かえって苦痛が和らいだように思うときがあります。その状態は二、三日つづいて、その後、強いゆり戻しがきます。というのも、苦痛を感じる力が身内に戻ってきたからです。ほっとするのは床に就くとき。ところが往々にして、体の痛みが、わたしが待ち焦がれる唯一の幸福である眠りを、わたしから奪ってしまうのです。挙句には、こんなに打ちのめされ、落ち込んでいるときに、あなたはご自分の境遇を台無しにしてしまったのだ、と思うと、さらに悲痛になります。わたしはあなたに相応しくない行為は厳に慎むつもりです。でも、わたしにはもはや、あなたが払ってくれた犠牲に報いるのに必要な能力が残っていないかもしれません。

これで、すっかりわたしの心のなかをお見せしました。お願いです、

どうかわたしに対して腹を立てないでくださいね。わたしが人を愛する力は、もうあなたとマチュウのためにしか残されていない。もしわたしのそばにいるものを失っているとしたり、たぶんオーギュストやアルベルチヌあるいはシュレーゲルなどを愛しているのだ、とやはり感じているかもしれない。しかしわたしの想像力の性質からいって、わたしの感情が向かうのは、あなたがたふたり。

さようなら、自分のことをしゃべりまくって恥ずかしくなります。でもあなたはわたしの感情を隈なく占めているのですもの、あえてそれについてお話してみました。さようなら」(前掲書、p.206-207)

長々と引用したのは1811年10月末の手紙です。赤裸々に苦しみを開陳するその語り口は、彼女のほかの著作からは想像できない率直な響きで、ほくたちを驚かせます。自信たっぷりにまくし立てる女、という通例のイメージを一挙に覆すに足る、心の素直さが表出されているように思います。そしてまたこの手紙ほど、レカミエ夫人がスタール夫人にとって本当に心を許せる、文字通りかけがえのない存在であったことを証すものはないでしょう。

それ以後のスタール夫人の手紙から推測すると、ジュリエットは自らの憂き目に健気に耐えながらも友を鼓舞していたらしく、スタール夫人は本当に目を見張る思いでした。

そしてついにスタール夫人は1812年5月、コペーを脱出。ウィーン、サンクト・ペテルブルク、ストックホルム経由でイギリスまで落ち延びる計画です。その間の数少ない手紙から、逃避行の詳細を知ることはできません。それを知るには『追放十年』のページをめくるしかない。それによれば彼女が1812年7月にロシア領内に入る頃、ナポレオン率いる遠征軍はロシア領内深く進攻しています。両者の足取りを時間的に追うと、まるで巨大な鷲が逃げまどう仔うさぎを敵国領内まで追いかけているようです。そしてナポレオンがモスクワ入城を果たす9月14日のわずか前に、スタール夫人はストックホルムをめざしてモスクワを去っています。

結局1814年4月6日に皇帝が退位したその一月あとに、スタール夫人は

念願のバリに戻ることができました。このとき彼女に残された人生の時間は、わずかに二年半。

「教えて頂戴、9時に迎えの馬車をやりますから、一時間だけわたしのところに来てくれる元気があなたにあるかしら。あなたに会いに行きたくとも、わたしは衰弱しきって、とてもそれは叶わない。もし来てもらえるなら、あなたの門番をマチュウのところに行って、わたしが自宅を待っているから、と伝えてください。わたしに残されたものすべてにかけて、あなたを抱きしめます」(同書、p.271-272)

この短い手紙のあと、ジュリエット・レカミエがスタール夫人から手紙をうけとることは、もはやありません。1817年2月スタール夫人は波乱と苦悩に満ちた生涯を閉じますが、レカミエ夫人が運命の人シャトーブリアンと再会するのは、まさにスタール夫人の病床でした。もう一人の作家が、まるで、いまもこの世を去る作家のあとを引き継ぐような格好で、ジュリエット・レカミエの人生に入ってくる。

しかしシャトーブリアンの手紙を読む前に、スタール夫人の不実な恋人コンスタンが、ジュリエットの誘いに乗って突然情炎を燃やす顛末を語らなければならない。冷徹な論争家、のイメージを跡形も無く打ち砕くコンスタンの手紙の数々は、ジュリエット・レカミエが、真に蠱惑的な女であったことを知らしめるものです。

註

- 1) *Souvenirs et correspondance tirés des papiers de Madame Récamier*, Michel Lévy Frères, 1860, pp.21-22
- 2) *Lettres de Madame de Staël à Madame Récamier présentées et annotées par E. Beau de Loménie, Domat*, 1952
- 3) 前掲書、p.172
- 4) *Dix années d'exil*, édition critique par S.Balayé et M. V. Bonifacio, Fayard, 1996, p.217